

# 論文の要約

氏 名： 松本 和剛

## ◆論文題目

日本の「親ばなれ子ばなれ」プロセスにおける関係的自律形成の理論的・実証的研究  
—知的障害者支援における包括的セクシュアリティ教育の媒介的機能に着目して—

## ◆要 約

### 序 章 問題意識と研究の枠組み

本研究は、軽度知的障害のある本人と親の関係性において、「自立」が経済的・物理的独立へと過度に還元され、関係性の再編や意思形成の学習プロセスが十分に検討されてこなかったという課題意識に立脚する。研究目的は、「親ばなれ子ばなれ」を関係変容プロセスとして理論化し、恋愛・親密性・意思形成に関わる包括的セクシュアリティ教育（CSE）が親子・支援関係の再編にいかなる役割を持ちうるかを理論的に検討し、実証的に明らかにすることである。方法は、発達保障論・ケア論を中核に、家族社会学および Foucault 権力論を補助的に援用し、理論検討と実証分析を往還させる。これにより、「自律」を関係の中で生成される社会的プロセスとして再定位する理論枠組みの構築を目指す。

### 第 I 部 理論編：関係的自律としての「親ばなれ子ばなれ」概念の理論的再構成

#### 第 1 章 自立概念に内在する管理性と親子関係の固定化—関係的自律の必要性の検討—

本章の目的は、日本の障害福祉領域において用いられてきた「自立」概念に内在する管理性を、体系的文献検討に基づいて抽出することである。あわせて、支援実践をめぐる学術論文記述に内在する統制／目標化の論理に着目し、従来の自立モデルでは親子関係の変容プロセスを十分に説明できない構造的課題を明らかにする。方法として、国内査読論文を対象とするスクーピングレビューを行い、63 の焦点コード、23 のサブカテゴリー、8 つのカテゴリーを導出した。分析の結果、親の介入構造、文化的規範、制度的配置が親子関係を固定化し、恋愛・親密性をめぐる学習機会の未整備が、関係回路の停滞と結びつく構造が示唆された。考察では、Foucault 権力論および家族社会学を補助的に援用し、支援が同時に支配として作用する二重性を整理した。以上より、本章は、「親ばなれ子ばなれ」を関係的自律の生成プロセスとして捉える必要性を提起するにとどめ、その理論的構造化は次章の課題とした。

#### 第 2 章 関係的自律の理論的枠組みの再構成 — 発達保障論・ケア論・支配構造論・家族社会学の統合的検討 —

本章の目的は、第 1 章で示唆された理論的課題に応答し、「親ばなれ子ばなれ」を関係的自律の生成プロセスとして説明可能とする理論枠組みを構築することである。方法として、発達保障論を理論的基盤とし、ケア論の応答性、Foucault 権力論の限定的援用、家族社会学

の文化規範分析を統合した理論再構成を行った。結果として、自律は個人の能力獲得に還元される属性ではなく、関係性・規範・制度条件の再編を通じて生成される社会的プロセスとして理論的に整理された。考察では、支援が同時に支配として作用しうる両義的構造を組み込んだ説明枠を整理した。以上より、本章は〈関係編成型自律〉という本研究の中核理論枠組みを構築した。

### 第3章 「親ばなれ子ばなれ」プロセスに内在する支援＝支配構造の可視化

本章は、「親ばなれ子ばなれ」プロセスに内在する〈支援＝支配〉構造を可視化し、関係変容の理論モデルを概念的に構成することを目的とする。方法として、Rodgers の概念分析枠組みに基づき、先行要件―属性―帰結の三層構造から支援関係の構造的再編プロセスを整理した。分析の結果、親の善意的介入や制度的規範は、本人の意思決定を支える一方で、選択肢を枠づける支配的作用を併せ持つことが示唆された。考察では、Foucault の権力論を補助的に援用し、支援と支配が関係の網の目の中で再配分される循環的再編プロセスとして「親ばなれ子ばなれ」を理論化した。以上より本章は、「親ばなれ子ばなれ」を生活構造・関係構造・主体形成を同時に再編する関係再編モデルとして整理し、第Ⅱ部の実証分析の理論的基盤を提示した。

### 第4章 包括的セクシュアリティ教育を媒介とした関係的自律形成としての恋愛と「親ばなれ子ばなれ」

本章は、「親ばなれ子ばなれ」プロセスを、恋愛と包括的セクシュアリティ教育（CSE）を媒介とした関係的自律形成のプロセスとして再理論化することを目的とする。CSE を、関係・境界・同意・ジェンダー・権利等を体系的に学習する社会的学習装置として位置づけ、親子・支援関係に内在する支援＝支配構造の再編可能性を理論的に検討した。さらに、知的障害者における恋愛経験を、自己決定と主体性を学習する関係の実践圏として捉え、家族規範や制度的制約が恋愛実践を停滞させる構造と、それを再編する CSE の媒介的機能および制度的限界を整理し、第Ⅱ部の実証分析における分析視角の理論的基盤を提示した。

## 第Ⅱ部 実証編：包括的セクシュアリティ教育を媒介とした関係的自律形成としての「親ばなれ子ばなれ」プロセスの実証的研究

### 第5章 恋愛経験を契機とした「親ばなれ子ばなれ」プロセスの変容

本章では、軽度知的障害のある当事者の恋愛経験を契機として、親子関係に内在していた「支援＝支配」構造がいかに揺らぎ、再編されていくのかを実証的に検討した。エピソード記述法を用い、診断受容、思春期、進路選択、恋愛、就労移行という生活プロセスにおける親子双方の語りを分析し、親の過保護的関与の緩和と、当事者の自己決定および感情の自律化が相互に連動して進行する循環的変容プロセスを明らかにした。さらに、支援者の介入や制度的条件が、この循環の進行を促進・制約する媒介要因として作用する構造を図式化した。これにより、「親ばなれ子ばなれ」は単なる生活移行や心理的分離の達成ではなく、恋愛や進路といった関係的出来事を媒介として、親子双方の承認構造と当事者の主体性が再編され続ける社会的学習プロセスであることが示唆された。

### 第6章 包括的セクシュアリティ教育が「親ばなれ子ばなれ」に及ぼす効果と限界

本章は、包括的セクシュアリティ教育（CSE）が、知的障害のある本人の恋愛経験を媒介

として「親ばなれ子ばなれ」プロセスに及ぼす効果と限界を実証的に検討した。本人の語りから、恋愛は関係的自律および社会的承認の形成に関与する実践として位置づけられる一方で、学習機会の不足や社会的スティグマの内面化により不安定さを伴うことが示唆された。親の語りには、保護と承認の二重性、不安と希望の交錯、役割再編という三層構造が確認され、恋愛が親子関係の再編を駆動する契機として機能していることが明らかとなった。さらに、仲間・支援者の媒介が、親子二者関係を相対化し、関係的自律の形成を促す重要な要因であることが示唆された。他方で、場の制約、文化的抵抗、理念と制度のねじれといった構造的限界も明らかとなり、CSE の制度化と専門的担い手育成の必要性が理論的に導かれた。

## 第7章 「親ばなれ子ばなれ」プロセスを支える支援者と制度的条件—制約と資源の両義性

本章は、「親ばなれ子ばなれ」プロセスにおいて、支援者のまなざしおよび制度的条件が、本人の意思決定実践にどのように関与しているかを明らかにすることを目的とした。方法として、逐語記録を基に、家族社会学の規範分析、ケア論の関係倫理、権力論の制約構造の視点を援用し、Rodgers の概念分析枠組みを参照して整理を行った。分析の結果、CSE に基づく関係調整実践は、発達保障論が想定する「社会的に保障される発達プロセス」を、支援者・親・制度との相互作用の中で具体化する媒介として機能していた。一方で、支援および制度は、本人の意思決定を支える条件となると同時に、その実践を規定・制限する側面も併せ持つことが確認された。以上より、本章は、「親ばなれ子ばなれ」を、個人の自立ではなく、ケア・権力・家族規範・制度条件が交錯する関係的再編プロセスとして位置づけた。

## 第8章 本研究の統合的考察—関係的自律としての「親ばなれ子ばなれ」再定義—

本章の目的は、本研究で得られた実証的知見を理論的に統合し、「親ばなれ子ばなれ」を関係的自律の生成プロセスとして再定義することである。方法として、第5～7章の質的分析結果を、発達保障論・ケア論・権力論・家族社会学および包括的セクシュアリティ教育（CSE）と照合し、Rodgers の概念分析枠組みに基づいて理論統合を行った。結果として、自律は個人の能力属性ではなく、承認・距離調整・応答的関与を通じて関係が再編され続ける循環的プロセスとして整理された。考察では、CSE が関係再編の媒介として機能し得る点と、支援＝支配の両義性を内包する支援構造の再設計可能性が示唆された。以上より、本研究は〈関係編成型自律〉という理論枠組みを提示し、「自立＝分離」モデルを相対化する視座を提供する。

## 終章 総括と今後の展望

本研究は、軽度知的障害のある本人と親の関係性をめぐる「親ばなれ子ばなれ」プロセスを、本論で提示した関係編成型自律モデルの射程に即して総括し、関係性が再編され続けることによって関係的自律が生成される循環的プロセスとして位置づけ直した。恋愛経験・教育実践・支援者関与・制度的条件に関する質的分析を基に、発達保障論・ケア論・権力論・家族社会学および CSE を再構成の視点から照合・再整理し、関係編成型自律モデルの理論的射程を構造化した。その結果、本人の意思決定、親の承認変容、支援実践の調整、制度条件の資源化が相互に連動する関係再編プロセスが示唆された。本研究は、発達保障論・ケア論を中核としつつ、Foucault の権力論を補助理論として位置づけ、家族社会学の視角および制度的条件の検討を媒介として、関係的自律の分析枠組みを提示した点に意義があり、今後は文化的条件や制度化プロセスの比較検討を通じた理論精緻化が課題である。

# Abstract of Doctoral Dissertation

Surname, First name : Matsumoto, Kazutaka

## **【Title】**

Theoretical and Empirical Analysis of the Formation of Relational Autonomy in the Japanese “Oyabanare–Kobanare” Process: Focusing on the Mediating Function of Comprehensive Sexuality Education for Persons with Intellectual Disabilities

## **【Abstract】**

### **Introduction: Research Framework and Purpose**

This study addresses a critical limitation in Japanese disability welfare policy and support practices, wherein “independence” has been excessively reduced to economic and physical self-sufficiency. Within parent–child relationships involving persons with mild intellectual disabilities, this reduction has obscured the relational reconfiguration processes and the learning of agency formation necessary for meaningful autonomy. Consequently, transformations in relationships, restructuring of recognition, and the development of decision-making capacities have remained insufficiently theorized and empirically examined.

The purpose of this research is to theorize the Oyabanare–Kobanare process—literally, the mutual “separation” of parents and adult children—not as a psychological or residential transition but as a relational reconfiguration process through which relational autonomy is socially generated. It further investigates, both theoretically and empirically, how Comprehensive Sexuality Education (CSE), particularly in the domains of intimacy, consent, boundaries, and agency formation, functions as a mediating apparatus in reorganizing parent–child and support relationships.

Methodologically, this study integrates developmental security theory, care ethics, and family sociology, with a limited application of Foucauldian power analysis. It employs an iterative design that moves between theoretical reconstruction and qualitative empirical analysis to reconceptualize autonomy as a socially generated, relationally mediated process rather than as an individual capacity.

### **Part I: Theoretical Reconstruction of Oyabanare–Kobanare as Relational Autonomy**

#### **Chapter 1: Managerial Rationalities Embedded in the Independence Concept**

Chapter 1 systematically examines the managerial rationalities embedded in

Japanese “independence” discourse. Through a scoping review of peer-reviewed Japanese academic literature, 63 focused codes, 23 subcategories, and 8 analytical categories were identified. The analysis reveals that parental intervention structures, cultural norms, and institutional configurations collectively stabilize parent–child relationships in ways that restrict relational transformation. Insufficient institutional provision of learning opportunities concerning intimacy and relationships further contributes to the stagnation of relational circuits.

Drawing on family sociology and Foucauldian power analysis, the chapter identifies a care–power duality in which support practices simultaneously function as care and regulatory control. The chapter concludes by proposing the need to reconceptualize Oyabanare–Kobanare as a relational autonomy formation process, leaving its detailed theoretical structure for subsequent chapters.

## **Chapter 2: Reconstructing the Framework of Relational Autonomy**

In response to the theoretical challenges identified in Chapter 1, Chapter 2 presents a revised analytical framework for relational autonomy. Developmental security theory provides a foundational structure, care ethics emphasizes responsiveness, and family sociology contributes normative analysis, while a limited Foucauldian perspective reveals power relations. Autonomy is theoretically organized not as an individual attribute but as a social process generated through the reconfiguration of relationships, norms, and institutional conditions. The chapter formalizes this framework as the study’s core theoretical model, termed Relationally Configured Autonomy.

## **Chapter 3: Visualizing the Care–Power Nexus**

Chapter 3 conceptualizes the care–power nexus underlying the Oyabanare–Kobanare process using Rodgers’ concept analysis framework (antecedents, attributes, and consequences). The analysis demonstrates that parental goodwill and institutional norms simultaneously support and delimit the agency of persons with intellectual disabilities. Oyabanare–Kobanare is theoretically organized as a cyclical relational reconfiguration process in which care and power are continuously redistributed across relational networks.

## **Chapter 4: Love, CSE, and Relational Autonomy**

Chapter 4 reconceptualizes Oyabanare–Kobanare as a relational autonomy formation process mediated by love and Comprehensive Sexuality Education. CSE is theorized as a social learning apparatus that facilitates systematic learning of consent, boundaries, gender, rights, and relational agency. Romantic experiences are positioned as relational practice domains through which agency and decision-making capacities are cultivated. This chapter

clarifies CSE's mediating functions and institutional limitations, establishing the analytical framework for the empirical investigation.

## **Part II: Empirical Investigation**

### **Chapter 5: Transformations Triggered by Romantic Experiences**

Using episode-narrative analysis, Chapter 5 empirically examines how romantic experiences destabilize and reconfigure embedded care–power structures within parent–child relationships. The findings demonstrate a cyclical transformation process in which the relaxation of parental overprotection and the development of agency and emotional autonomy mutually reinforce each other.

### **Chapter 6: Effects and Limitations of CSE**

Chapter 6 analyzes the effects and structural limitations of CSE. Romantic relationships function as practices of relational autonomy and social recognition, whereas the internalization of stigma and insufficient learning opportunities generate instability. The mediating roles of peers and supporters emerge as critical factors in facilitating relational autonomy, while institutional and cultural constraints reveal the necessity for the professionalization and formalization of CSE.

### **Chapter 7: Supporters and Institutional Conditions**

Chapter 7 examines how supporter perspectives and institutional arrangements shape agency practices. Support and institutions operate ambivalently as both enabling resources and regulatory constraints, positioning Oyabanare–Kobanare as a relational reconfiguration process shaped by care, power, family norms, and institutional conditions.

### **Chapter 8: Integrated Theoretical Synthesis**

Chapter 8 synthesizes the empirical findings with theoretical frameworks and reorganizes Oyabanare–Kobanare as a cyclical relational autonomy generation process. CSE is positioned as a mediating mechanism enabling relational restructuring, and the possibility of redesigning support systems that inherently contain a care–power duality is theoretically articulated.

## **Conclusion**

This study repositions Oyabanare–Kobanare as a relational reconfiguration process that generates relational autonomy through the continual restructuring of relationships. It contributes a novel analytical framework integrating developmental security theory, care ethics, family sociology, and Foucauldian power analysis. Future research should refine this model through cross-cultural and institutional comparative studies.